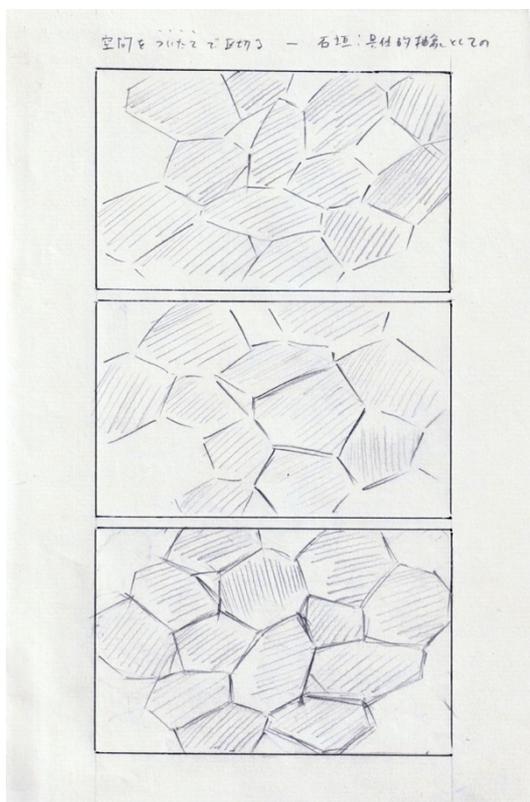


資料① PCAF 参加プロジェクト案 (第一弾)

- * 各画像はアーティストによるコンセプトドローイング、または参考図版です。
- * 各プロジェクト案の詳細はPCAD ウェブサイトで公開中です。



池田 剛介 | Kosuke Ikeda

プロジェクト名：衝立と絵画(仮)

コロナ禍により「私たちの身体がモノによって部分的に隔てられている今、隔離を全面化することで安寧を得るのでもなく、しかし隔たりを取り外してリアルな外部に出会うというのでもない、部分的隔離のただなかにある不確かな感覚の共有は可能か」と問う池田。スミツソンの作品から「ラバーハンド錯覚」まで多様な事象を援用し、制作と思考に臨みます。

1980年福岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。モノや絵画をめぐる関心を軸に制作やプロジェクトを行う一方、批評誌などでの執筆を手がけている。主な個展に「現象と干渉」(MEDIASHOP | gallery、京都、2019年)、「モノの生態系」(絶対空間、台南、台湾、2015年)、「メルボルン芸術発電所」(RMIT PROJECT SPACE、メルボルン、オーストラリア、2013年)など。主なグループ展に「Malformed Objects」(山本現代、東京、2017年)、「Regeneration Movement」(国立台湾美術館、台中、2016年)、「あいちトリエンナーレ2013」(愛知、2013)、「東京芸術発電所」(東京藝術大学、2011年)など。主なプロジェクトに「モノと占拠」(京都市立芸術大学、2018年)、「モノの占拠」(京都芸術センター、2016年)など。著書に『失われたモノを求めて 不確かさの時代と芸術』(夕書房、2019年)。2019年より京都にてアトスベース「浄土複合」をディレクション。

[Website](#)



小泉 明郎 | Meiro Koizumi

プロジェクト名：解放されたプロメテウス

国家、共同体と個人、身体と感情の関係性を、虚実を織り交ぜた映像やパフォーマンスで探究する小泉は、自身のVR演劇作品『縛られたプロメテウス』の続編ともいえる新たなVR作品で参加。失われた戯曲をコロナ禍の現代に接続し、儀礼的パフォーマンスとして再構築します。

※本作はまず「シアターコモンズ'21」(2021年2月)にて発表された後、作品を更新させてPCAF 展覧会のためのVRインスタレーション作品になります。

協働：シアターコモンズ(芸術公社)、A440(XR制作会社)、Rhino Studios(XR制作会社)

1976年群馬県生まれ。チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン(ロンドン)にて映像表現を学ぶ。現在は国内外で滞在制作し映像やパフォーマンスによる作品を発表している。「あいちトリエンナーレ2019 情の時代」(愛知県美術館/愛知芸術文化センター、2019年)、「第14回シャルジャビエンナーレ」(シャルジャ美術館、アラブ首長国連邦、2019年)、個展「Battle lands」(マイアミ・ペレス美術館、マイアミ、2018年)他、国内外の展覧会・国際展に多数参加。主な受賞歴に「Artes Mundi 9」ファイナリスト・ノミネート、「第30回タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞」。作品は、東京国立近代美術館、国立国際美術館(大阪)、テート・モダン(ロンドン)やニューヨーク近代美術館など多くの美術館に収蔵されている。

[Website](#)



サエボーグ | Saeborg

プロジェクト名:

ステイホームはサヤエンドウの夢を見るか？ / Slaughterhouse シリーズ/サエチキンローストレッグス

ラテックス製の着ぐるみを自作、装着するパフォーマンスで知られるサエボーグは今回、昨今の社会情勢や人々の心理を反映するような2プランを提案。睡眠ポッドのようなサヤエンドウの中で眠り、ツルで繋がる「サエエンドウ」や、食べる部分が多くなるよう人工進化させられた「サエチキンローストレッグス」を構想中。

1981年富山県生まれ。東京都拠点。サエボーグはラテックス製の着ぐるみ(スーツ)を自作し、自ら装着するパフォーマンスを展開するアーティスト。これまでの全作品は、東京のフェティッシュパーティー「Department-H」で初演された後、国内外の国際展や美術館で発表されている。2014年に岡本太郎現代芸術賞にて岡本敏子賞を受賞。主な参加展覧会に「第6回アテネ・ビエンナーレ」(Banakeios Library、ギリシャ、2018年)、「DARK MOFO」(Avalon Theatre/MONA、ホバート、オーストラリア、2019年)、「あいちトリエンナーレ」(愛知県芸術劇場、2019年)、「Slaughterhouse17」(Match Gallery/MGML、リュブリャナ、スロベニア、2019年)、「Cycle of L」(高知県美術館、2020年)など。

[Website](#)



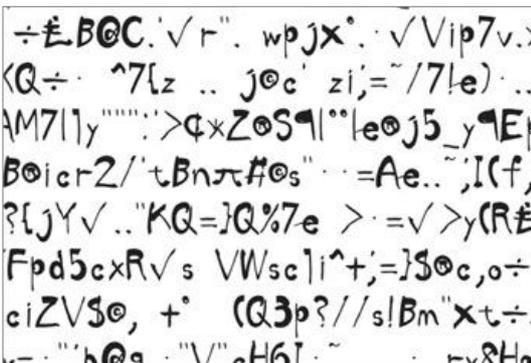
竹内 公太 | Kota Takeuchi

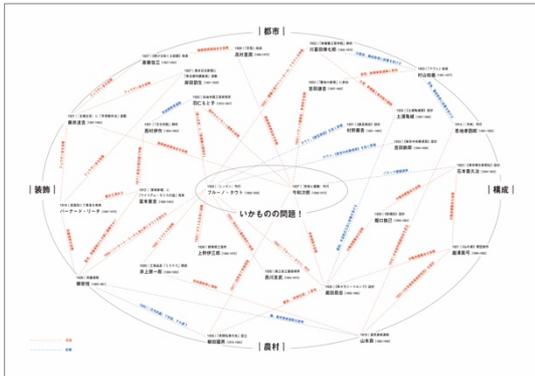
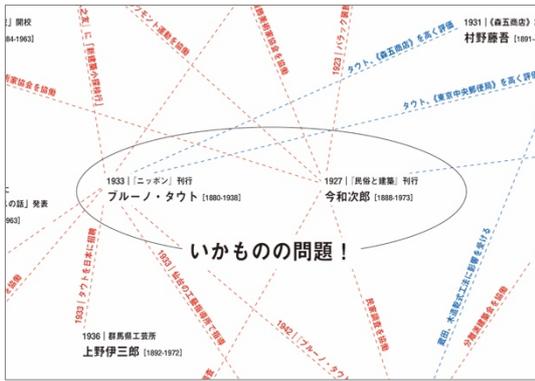
プロジェクト名: 手紙と怪物

竹内は2020年に福島県の帰還困難区域で自らの身体を元にフォントを制作しました。今回はこれらの文字を用いた「手紙」をレーザープリンターで出力、これを素材に「怪物」のイメージを制作予定。そこには、コロナ禍のような事態で、命を守るために個人の権利が制限される時、個人の身体と「国家という想像上の身体」との混同が誘発される懸念と、そこでの情報のやりとりへの洞察が込められます。

1982年生まれ。福島県帰還困難区域内の展覧会「Don't Follow the Wind」実行委員。東京電力福島第一原発ライブカメラの「指差し作業員」の代理人。パラレルな身体と憑依をテーマに、映像・写真のインスタレーション等を制作。失われた歴史の痕跡を辿り、隔絶された土地で協働しながら、メディアと人の関係を探る。2020年個展「Body is not Antibody」(SNOW Contemporary、東京)にて、パンデミックにおける国家/身体のイメージについてのインスタレーションを発表。

[Website](#)





中村 裕太 | Yuta Nakamura

プロジェクト名：いかもの問題！

『日本美の再発見』等で知られるブルーノ・タウトは1933年、建築学者・民俗学研究者の今和次郎と過ごしました。桂離宮などの伝統美とは対照的な浅草を今と歩いたこの日の日記には「いかもの問題」なる奇妙な一言があります。中村は今回、彼のいう「いかもの」の内実を読み解き、また関東大震災以降の東京建築を俯瞰しながら、100年近くを経た現在の「新しい成長」のかたちを探ります。

1983年東京生まれ、京都在住。京都精華大学芸術学部特任講師。2011年京都精華大学芸術研究科博士後期課程修了。博士(芸術)。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器やタイルなどの学術研究と作品制作を行なう。近年の展示に「六本木クロッシング 2013：アウト・オブ・ダウト—来たるべき風景のために」(森美術館、東京、2013年)、「第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」(クイーンズランド・アートギャラリー、ブリスベン、2015年)、「第20回シドニー・ビエンナーレ」(キャレッジワークス、2016年)、「あいちトリエンナーレ」(愛知県美術館、2016年)、「柳まつり小柳まつり」(ギャラリー小柳、東京、2017年)、「MAM リサーチ 007：走泥社—現代陶芸のはじまりに」(森美術館、東京、2019年)、「表現の生態系：世界との関係をつくりかえる」(アーツ前橋、群馬、2019年)など。著書に『アウト・オブ・民藝』(共著、誠光社、2019年)。

[Website](#)



西村 雄輔 | Yusuke Nishimura

プロジェクト名：yamajior imono*works 2021

——源の岩清水より果てに広がる河のほとりに

2006年から群馬県、桐生川のほとりの元織物工場が続く「yamajior imono*works」は、建物の修繕等を通じて、かつて人々が生きた場を改めて「生きる場」へ向かわせる活動。今回 PCAF への応答として意識を拡張し、「地との対話」を通じて桐生市各所を巡り「まだ見たことのない光景」を求めていきます。

協働：yamajior imono*works (西村雄輔、山崎裕之、石井理絵)、生方昇 他(予定)

1976年福岡生まれ。2001年に東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了。2003年より群馬県桐生市の産業遺産である旧織物工場の改修／修繕プロジェクトを手がける。Moriyoshi Reconstruction Project (2003～2004年、旧森山芳平織物工場)、現在長期に渡り進行中のYAMAJIORIMONO*WORKS (山治織物工場、2006年～)では、傷んだ木造の建物に工場主とともに実際に手を入れながら、その場所と対話し、ものが語る歴史を読み、今を生きる場をつくる行為の在り方を提示している。

[Website](#)

I want my baby to die every month.



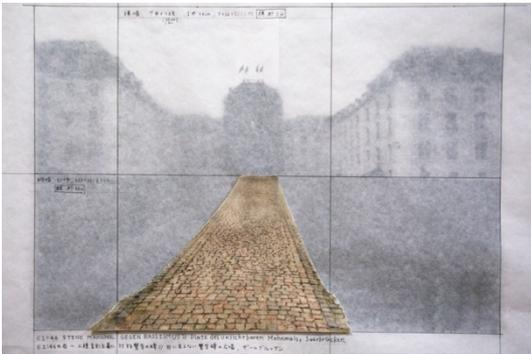
百瀬 文 | Aya Momose

プロジェクト名：フローズ・パウオーニス（仮）

今回、百瀬は彼女自身と、ポーランドに住むある活動家の女性との往復書簡のような形で進む映像作品を構想中です。ある効能を隠蔽された「花」を手がかりに、ときに内省的な独り言のように語られる言葉とイメージを行き来しながら、人類にとっての未曾有の危機の前で、国家に管理され、翻弄される身体器官としての「子宮」の存在を浮かび上がらせます。

1988年東京生まれ。近年の主な個展に「I. C. A. N. S. E. E. Y. O. U」（EFAG、東京、2019年）、「サンプルボイス」（横浜美術館アートギャラリー1、神奈川、2014年）、主なグループ展に「彼女たちは歌う」（東京藝術大学 美術館陳列館、2020年）、「六本木クロッシング 2016 展：僕の身体、あなたの声」（森美術館、東京、2016年）、「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」（国立新美術館、韓国国立現代美術館、東京、2015-16年）など。2016年度アジア・カルチュラル・カウンシルの助成を受けニューヨーク（Triangle Residency）に、その後ソウル（SeMAレジデンス）に滞在。2019年、イム・フンスン氏と共同制作した《交換日記》が全州国際映画祭（JIFF）に正式招待される。

[Website](#)



柳瀬 安里 | Anri Yanase

プロジェクト名：

そこに、何が映っていても目に見えない（仮）

ドイツ西部、ザールブリュッケン城はかつて同地のゲシュタポ本部となった歴史があり、後に城へと続く石畳の裏には、ナチス政権時代以前に存在していたユダヤ人墓地の名前が刻まれたといひます。柳瀬はこの「2146の石—人種差別主義に対する警告碑」と呼ばれる石畳を撮影し、布でこれを再現することを試みます。彼女はそれを「話をする場所」にしたいとします。何かを重視した結果、ないがしろにしてきた別の可能性や時間、自然について考えること

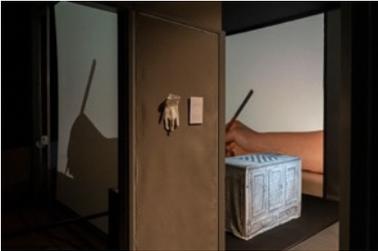
1993年埼玉県生まれ。2016年京都造形芸術大学美術工芸学科現代美術・写真コース卒業。身の回りの出来事を出発点とし、それが何なのかを考えるため、知るためのひとつの方法として作品を制作している。知ったかぶりすることなく反応することを大切にしたいと思っている。近年の参加展に、「Oh! マツリ☆ゴト 昭和・平成のヒーロー&ピーポー」（兵庫県立美術館、2019年）、「Gallery selection: Video works」（ギャラリー小柳、東京、2019年）、「ニューミュージアム#3 菊池和晃・黒川岳・柳瀬安里」（京都芸術センター、2020年）などがある。

* 以下は現在プロジェクト構想中・進行中のアーティスト



青柳 菜摘
Natsumi Aoyagi

Photo by Shintaro Wada



【参考作品】《彼女の権利—フランケンシュタインによるトルコ人、あるいは現代のプロメテウス》2019年 展示風景 Photo by Shintaro Wada

1990年東京都生まれ。ある虫や身近な人、植物、景観に至るまであらゆるものの成長過程を観察する上で、記録メディアや固有の媒体に捉われずにいかに表現することが可能か。リサーチやフィールドワークを重ねながら、作者である自身の見ているものがそのまま表れているように経験させる手段と、観者がその不可能性に気づくことを主題として取り組んでいる。近年の活動に「青柳菜摘 + 佐藤朋子『TWO PRIVATE ROOMS - 往復朗読』(theca、東京、2020年)、「オープン・スペース 2019 別の見方で」展参加 (NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]、東京、2019年)、個展「富士日記」(NADiff Gallery、2016年)、「第10回 恵比寿映像祭」参加 (東京都写真美術館、2018年) など。また書籍に小説『黒い土の時間』(自家版、2017年) などがある。プラクティショナー・コレクティブである「コ本や honkbooks」主宰。「だつお」というアーティスト名でも活動。

[Website](#)



雨宮 庸介
Yosuke Amemiya

Photo by Kiichi Kawamura



【参考作品】《りんごと手》2018年、林檎(木材に油彩)、人間の左手、大理石、ステンレス 個展「あ、あな、あなた」展示風景、ARTS ISOZAKI、茨城、2018年 Photo by Kenji Otani

1975年茨城県生まれ。ベルリン/東京在住。Sandberg Institute (アムステルダム) Fine Art Course 修士課程修了。ドローイング、彫刻、パフォーマンスなど多岐にわたるメディウムによって作品を制作。「六本木クロッシング 2010 展: 芸術は可能か?」(森美術館、2010年)、「Wiesbaden Biennale 2018」(ヴィースバーデン市内各所、2018年)、「DOMANI・明日展」(国立新美術館、2018年)等では長期にわたる会期の全開館時間に在廊し、パフォーマンスを行なった。「国東半島芸術祭」(2014年)への参加を機に2014-2014年のプロジェクト「[1300年持ち歩かれた、なんでもない石](#)」を開始。リンゴや石や人間などのありふれたモチーフを扱いながら、その超絶技巧や話法により、いつのまにかに違う位相の現実に身を置かれてしまう——体験の提供により「現代」と「美術」について再考をうながす作品を制作している。

[Website](#)



遠藤 麻衣
Mai Endo



【参考作品】《蛇に似る04: たまご丸》2020年
Photo by 松尾宇人

1984年生まれ。2016年より東京芸術大学美術研究科博士後期課程美術専攻油画(壁画)研究領域在籍。主な展覧会として、「彼女たちは歌う」(東京芸術大学大学美術館 陳列館、2020年)、「新水晶宮」(Talion Gallery、東京 / VOU、京都、2020年)、「When It Waxes and Wanes」(VBKÖ、ウィーン、オーストリア、2020年)、「アイ・アム・ノット・フェミニスト!」(ゲーテ・インスティトゥート東京、2017年)などがある。パフォーマーとして小林勇輝「Still live」(ゲーテ・インスティトゥート東京、2019年)、俳優として指輪ホテル「バタイユのバスローブ」(naebono art studio、札幌 / BUoY、東京、2019年)に出演。2018年に丸山美佳と「Multiple Spirits (マルスピ)」を創刊。主なエッセイに「毛むくじらの山」(蜘蛛と箒『原稿集』、2020年)など。

[Website](#)



大和田 俊

Shun Owada

Photo by 百頭たけし



【参考作品】《unearth》2017年「裏声で歌へ」展での展示風景、小山市立車屋美術館、栃木、2017年

Photo by 富田了平

1985年栃木県生まれ。現在、東京を拠点に活動。音響と、生物としてのヒトの身体や知覚、環境との関わりに関心を持ちながら、電子音響作品やインスタレーションの制作を行なっている。東京藝術大学音楽学部卒業、同大学院美術研究科修了。近年の主な個展に、「破裂 OK ひろがり」(小山市立車屋美術館、栃木、2020年)、「大和田俊 | unearth」(ボルボ スタジオ青山、東京、2017年)、「Paleo-Pacific」(トーキョーワンダーサイト本郷、東京、2016年)、「unearth」(NTT インターコミュニケーションセンター、東京、2015年)など。同、参加グループ展やフェスティバルには「WRO Biennale」(National Museum in Wroclaw、ヴロツワフ、ポーランド、2019年)、「Ars Electronica 2018」(POSTCITY、リンツ、オーストリア、2018年)、「不純物と免疫」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、東京、2017年)、「裏声で歌へ」(小山市立車屋美術館、栃木、2017年)などがある。

[Website](#)



SIDE CORE

Photo by 濱田 晋



Photo by 前谷 開

2012年より活動開始。メンバーは高須咲恵、松下徹、西広太志。ストリートカルチャーを切り口にアートプロジェクトを展開。「風景にノイズを起こす」をテーマに、都市や地域でのリサーチをベースにアクションを伴った作品を制作。ギャラリーや美術館での展覧会開催の他に、壁画プロジェクトや街を探索する「ナイトウォーク」など野外空間での活動を展開。全てのプロジェクトは公共空間での視点や思考を転換させ、表現や行動を拡張することを目的としている。主な参加展覧会に「大京都芸術祭」(京丹後、京都、2020年)、「生きている東京展」(ワタリウム美術館、東京、2020年)、オンライン展「Out of Blueprints by Serpentine Galleries」(NOWNESS、2020年 ※EVERYDAY HOLIDAY SQUADとしての出展)。



Chim ↑ Pom

Photo by 山口聖巴



【参考作品】《A Drunk Pandemic》2019年 Photo: Michael Pollard Courtesy of the artist, ANOMALY and MUJIN-TO Production

卯城竜太・林靖高・エリイ・岡田将孝・稲岡求・水野俊紀により、2005年に東京で結成されたアーティストコレクティブ。時代のリアルを追究し、現代社会に全力で介入したクリティカルな作品を次々と発表。世界中の展覧会に参加するだけでなく、独自でさまざまなプロジェクトを展開する。東京電力福島第一原発事故による帰還困難区域内で、封鎖が解除されるまで「親に行くことができない」国際展「Don't Follow the Wind」(2015年-)の発案と立ち上げを行い、作家としても参加している。現在は新宿の「ホワイトハウス」を拠点に活動。そのプロジェクトベースの作品は、日本の美術館だけでなくグッゲンハイム美術館(ニューヨーク)、ポンピドゥー・センター(パリ)などにコレクションされ、アジアを代表するコレクティブとして時代を切り開く活動を展開中。

[Website](#)



長谷川 愛

Ai Hasegawa



【参考作品】《Human X Shark》2017年、リサーチ・プロジェクト

アーティスト、デザイナー。バイオアートやスペキュラティブ・デザイン、デザイン・フィクション等の手法によって、生物学的課題や科学技術の進歩をモチーフに、現代社会に潜む諸問題を掘り出す作品を発表している。IAMAS 卒業後渡英。2012年英国 Royal College of Art にて MA 修士取得。2014年から2016年秋まで MIT Media Lab にて研究員、MS 修士取得。2017年から2020まで東京大学 特任研究員。2019年から早稲田大学 非常勤講師。2020年から自治医科大学と京都工芸繊維大学にて特任研究員。「(不)可能な子供/(im)possible baby」が第19回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。森美術館、アルスエレクトロニカ等、国内外で多数展示。著書に「20XX年の革命家になるには——スペキュラティブ・デザインの授業」(ビー・エヌ・エヌ新社、2020年)がある。

[Website](#)